

INTERVIEW



Profile 1992年に国連ボランティアとしてボスニアの人道援助活動に、1994年に南アフリカの国連選挙・平和運動監視活動に参加。1995年、ユニセフ・ミャンマー事務所へ赴任。ユニセフ・イラク事務所などでの勤務の後、2000年9月からユニセフ・ソマリア・ボサソ事務所長。

なぜ戦争が続いているの？

Q ソマリアの戦争など、歴史的なことに教えてください

A ソマリアで起こっている内戦は、民族の紛争ではありません。ソマリアは単一民族の国です。

ソマリアは1887年にイギリス領とイタリア領に分かれてしまいました。1960年6月にイギリス領だったソマリランドが独立し、その2日後にイタリア領だったところが独立しました。その後、2つの国がひとつの国として独立し、政府ができました。しかし、ソマリア全体をまとめるには苦労しました。なぜなら、ソマリアには遊牧民族が多く、その上、先祖代々続く氏族という家族の大きなかたまりがいくつもあって、氏族同士の間で昔からあったからです。

そこに、アメリカと旧ソビエト連邦の間の東西冷戦が大きな影響を与えました。ソマリアが独立した後、政権についた大統領はソビエトの支援を受けて、共産主義の国づくりをめざしました。その後、ソマリアのとなりの国エチオピアで、軍が政権をうばうクーデターが起き、とつぜん共産主義の政権ができました。それを見たソビエトはエチオピアへの支援に力を入れるようになります。そうすると、今度は共産主義をきらうアメリカが政治や軍事の面からソマリアに力を入れるようになりました。こうして、ソマリア国内には、アメリカとソビエトからきた武器や弾薬がたまっていったのです。

ソマリアの政府は、政府に反対する勢力をおさえきれず、国全体を治めきれなくなってしまいました。政府がなくなってしまった後は、さまざまな勢力が武器を略奪して争いを始め、それ以来、いまだに争いが続いています。

Q 百年も前の植民地主義やその後のアメリカやソビエトが今のソマリアをつくっているということですか？

A アフリカの地図を見ると、国境も不自然にまっすぐです。植民地の歴史のためです。今も、アフリカの多くの国は旧宗主国（昔支配していた国）の欧米の国に経済などで深いつながりがあり、そのつながりなしでは生きられないような構造になっていますね。

人びとの暮らしとユニセフの支援

Q ソマリアではどのような農業がおこなわれているのですか？

A ソマリアの気候は北部と南部で大きく違います。北部には遊牧民族が多く住んでいます。南部には大きな川が2本流れていて、その川にはさまれた肥沃な土地では、バナナやソルダム(穀物の一種)などが育てられています。昔はお米もとれました。メイズ(とうもろこし)が食糧支援で届けられたりしますが、ソマリアの人はあまり好きではありません。遊牧民でも半牧半農という人もいますし、場所によっていろいろ暮らし方をしています。



ソマリアって国、知ってた？



「ソマリア」と聞いて、どこの国がすぐにわかりますか？ アフリカの東、アフリカ大陸の角のようになっていっているところにあるソマリアは、長らく内戦と干ばつや洪水などの自然災害のために、人びとの生活はずたずたにされてきました。でも、ソマリアのことを知っている人は少なく、国際社会もあまり関心を持ってはいけません。そのソマリアの話をしてくれたのは、ソマリア・ボサソの町にあるユニセフ事務所 長の中井裕真さん。中井さんによると、ソマリアの状況は「国全体が難民キャンプ」のような感じなのだそう。

Q 農業に関する技術援助などはありますか？

A 技術協力などは、国同士で契約がかわされて、それにもとづいておこなわれます。ソマリアの場合、国全体を治める政府がないから、国と国の間での技術協力はいいです。今、国連に籍のあるソマリア政府は首都モガディシュの一部しか治められていません。だから、支援をしているのはユニセフなどの国連機関やNGOだけです。

Q ソマリアの子どもたちが笑顔になる時はどんな時ですか？

A ソマリアの第一印象は「子どもたちの笑顔が少ない」でした。でも、大変な中でも、それなりに普通の喜怒哀楽がある生活が見えてきました。小学校で勉強している子どもたちの目はとても生き生きしていますし、新しい教科書を持っていくと、とても喜んでくれますよ。

Q ソマリアの子どもたちは日本のことを知っていますか？

A 知っているつもりなのではないかな。子どもたちとサッカーをやったときには「ナカタ」とか「ナカムラ」なんてよばれましたよ。

Q ユニセフの支援はソマリアの人が求めているものと合っていますか？

A ソマリアの子どもたちが置かれている状況は、世界で1、2を争うくらい悪いです。4人にひとりには5歳になる前に亡くなるし、8人にひとりくらいしか学校に行きません。そんな中で私たちがやらなければならぬことは、まず、子どもの死亡率を下げることです。

ソマリアで、はしかの予防接種率はわずか16%です。内戦で入れない地域があったり、資金が足りなかったりという理由もありますが、予防接種の大切さを親が理解していないことも理由です。暑いところで予防接種をすると子どもが病気になる、そんなまじがったうわさが広がって、予防接種に行っても拒否されてしまうこともあります。私たちがしたい支援と、彼らがしてほしいことがずれている例です。それでも、予防接種は必要だとうたえるわけですけれど。現地の希望と合っている例は教育です。教育の大切さを知っている親たちがけななしのお金を出し合って、小学校を

つくり、先生をよんで来て、学校を開いています。そんな親に「学校をつくったので、教材や備品を支援してくれないか？」という話が出て支援がはじまる場合があります。そういう場合、ユニセフの支援と現地の要望は合っていますよね。

Q 戦争の中で生きている子どもたち、心の負担が大きいと思うのですが、どのようにサポートしているのですか？

A ユニセフは心に傷を負った子どもたちへのサポートをしていて、それなりに経験もつんでいます。しかし、残念ながらソマリアではまだそのような支援活動はできていません。

たとえば、コソボの難民キャンプの場合、対象となる子どもがかたまっていて、集中的に支援ができますが、ソマリアは日本の約1.8倍の面積に日本の人口の20分の1(600~700万人)の人が住み、子どもたちも散らばっています。

内戦が続く、子どもたちがどんどん亡くなっているような地域では、薬や食糧などの支援が先、教育は後、と思われがちです。でも、今、私たちはこういふところだからこそ教育が必要だと主張して、小学校教育に力を入れています。教育は発展性があります。学校で学ぶことが生きのびるために必要な知識を得ることにつながったり、小学校が「普通の」生活を子どもたちに提供する場になったりします。

それから、まだ小さい規模ですが、元子どもの兵士の社会復帰のための支援を始めています。首都モガディシュで、120人受け入れ予定のところに600~700人の応募がありました。そこでは職業訓練などがおこなわれています。

女の子は差別されている？

Q 男の子より女の子の就学率が低いのは、「女の子に教育はほだ」という考え方の人が多いということですか？

A そういう部分も少なくはないと思います。ただ、男の子も女の子も小学校に通っている子どもは圧倒的に少ないのです。男の子であれ女の子であれ、小学校に行っても意味がない、家畜のらくだを追わせたり、漁の手伝いをさせたり、家の手伝いや弟や妹の世話をさせたりする方が多く考えられているようです。高学年にあがるほど、女の子の退学率が高くなります。それには、学校が女の子の通える環境になっていないという理由もあります。ソマリアでは、女の子のトイレは入っていく姿が見えないように壁をつくっておかないといけません。教室も男の子と女の子がべつべつのことが多いです。そのようなトイレや教室がある小学校が少ないのです。

Q 女性は、やっぱり差別されているのですか？

A それは見方によると思います。水くみや家事、子どもの世話など重労働を担っているのは確かに女性です。でも、日本や欧米の女性に対する考え方をそのまま持ちこんでも、すぐに根づく



©UNICEF/Giacomo Pirozzi



©UNICEF/HQ00-04781/Chalasan

は思えません。たとえば、安全な水が手に入る水場をつくるとし
ましよう。その管理委員会を住民でつくってもらい、そこに女性
を必ず入れてもらおうとしてもあまり意味はありません。なぜなら、
そうした場で女性が発言する習慣はないのです。

聞いた話ですが、大切なことを決める長老会議に出てく
る男性は、家庭で妻に「こんなことを話してきなさい」と言
われてきているそうです。ユニセフは、大切なことを決める
ときには女性の意見が反映されるように、と考えていますが、
(委員会や会議に女性が出ていなくても) そういう仕組みがあ
るにはあるのだよと教えられました。

それから、教科書に女の子が会議の議長をやっている絵を
入れるなどの試みもはじまっています。そんな教科書を見て、
だんだんみんなの意識が変わっていく効果を期待しています。

中井さんから見た日本、国際協力



も、今は日本人と見られることがうれしい、日本人であることに
誇りを感じています。というのも、世界のどこに行っても、日本
に対して敬意を持たれていることを感じるからなんです。有名な
のは電気製品や車ですが、よく聞くと、そういうものを生み出し
た日本人や日本の社会に対する尊敬があることがわかるんです。

Q 中井さんから見た日本とソマ
リアについて教えてください

A 日本はいい国ですよ。でも、実
は、こういう仕事を始めた理由のひ
とつは日本を出たかったからなんです。
外国に出ても最初は日本人スタッ
フとして見られるのがいやでした。で

ソマリアについては...、ソマリアに限りませんが「世界は
不公平だな」とは思いますね。夜の地球を撮影した衛星写真
を見たことがありますか？ 日本やアメリカは電気でピカピカ
光っているのに、ソマリアも、私が働いたことのあるマン
マーもイラクも真っ暗ですもんね。

Q 最近、国際協力が何かきれ
いごとのように言われているの
ですが、中井さんは国際協力をど
う考えますか？

A 私、かっこいいかな、とあこが
れて入った世界ですが、実際はきれい
ごとではすまないこともたくさんありま
す。大学で先生が福祉について言ったことですが、福祉には「熱
き心と冷たき頭」が必要だ、理想は大事だが、理想を具体的
なサービスに置きかえていくときに、現実を見ずえサービスをつ
くりあげられるプロフェッショナルになってほしい、と。これは国
際協力の仕事にも当てはまると思います。



Q 現場にいて、実際に人が死んでいたりするのを見て、
中井さんは人を助けることや命をどのように思いますか？

A 人が目の前で亡くなるのはつらいです。でも、とらわれすぎ
ては先へ進めなくなります。ソマリアでは毎年コレラが流行し、
今年の4月にも300人くらいが私の担当地域で亡くなりました。
病院に行くこととひどい状況で、言葉もなかったのですが、そこで止
まってしまうわけにもきません。こういう時こそ「熱き心と冷た
き頭」です。現状を受け止めて、「じゃあどうする」と解決の道
を探すんです。それで給料をもらっているわけですし、この給料
はみんながユニセフに募金してくださった中から出ていることも忘
れてはいけないことです。

それから、あまり「助ける」とは考えません。募金をして
くださるみんなと現地の「橋渡し」をしている感じがします。
ユニセフは「方法を提供」します。魚を釣ってあげるんじゃ
なくて、釣り方を教える、といったふうに。現地の人々は自分
達で暮らしに合うように工夫します。ときには、私たちが思
いもつかないようなもっとよい方法を生み出していることもあ
ります。私たちはそれを教わって、別の村
でそれを広めたりもします。結果的に「助
けている」部分もあるかもしれませんが、
そう意識したことはないです。



メッセージ

Q 日本の子どもたちに何を望みますか？

A 日本はもうダメなんじゃないか、なんて言われていますが、半
年くらい日本を留守にして帰ってくると、どんどん新しいものが
出て変わっている。世界的に見たら、日本みたいな国は限られて
います。日本の支援やパートナーシップを求めている国にこたえら
れるだけの体力は持っていないといけないと思います。それだけ
の期待があるということは自覚してほしいと思います。

Q 開発途上国での支援活動をめざしている人に
アドバイスを

A よく考えたほうがいいと思いますよ。日本で生活していれば
当たり前前かがいのが開発途上国では当たり前ではありません。この
ような仕事にすべての人が向いているわけではないし、また、国連に入り
たい人はたくさんいるわけですが、「国連に入ることを目的にしない
でほしい」と思います。国連とは大きな器であってその
中にいろいろな活動分野があります。まず自分
がどんな分野で何がしたいのかをはっきりさせた後
で、それを実現する手段として国連機関やNGOをめざしてくだ
さい。



Q 高校で栄養の勉強をしているので、将来は理系の大
学に行きたいのですが、それでもユニセフで働けますか？

A もちろん。栄養不良が深刻な国はたくさんあり、栄養はユ
ニセフの活動でも重要な分野です。理系の専門性が求められる
活動分野はたくさんありますよ。



©UNICEF/HQ00-00500/Chalasan

インタビューを終えて...

ネットワーク記者 の感想

私は将来、開発途上国での支援活動に参加した
私 と思っています。それが、今回の記者を希望
した一番の動機でした。今回のインタビューを通して、
自分の中の意識が大きく変わりました。中井さんのお
話を聞いていて、一番ショックだったのは自分の今まで
考えていたことと現実の違いでした。私は今まで、
支援活動に対して理想やあこがればかりで、カッコイ
イ部分しか知らなかったのだということに気づかされま
した。中井さんのお話の中で、「熱き心と冷たい頭」
という話がありました。それを自分のことと考えると、
私には「冷たい頭」がないと思いました。いつも
感情で動いてしまし冷静な判断ができなくなっ

まいます。中井さんのように、時には冷たい頭で通し
ていけるような強い人間になりたいと思いました。これ
から、自分の目標を実現させていく上での大きな課
題が見つかった気がします。時間をかけて少しずつ自
分を変えていくと同時に、夢を追いかける熱い心だけ
はずっと持ち続けたいと思いました。

西子 紗世 17歳

す ごい体験をしたな、と思っています。ずっと
夢のような、遠い存在にあった「ユニセフ」がな
んだか身近に感じられるようになりました。また、今回
インタビューをさせていただいた中井さんもお話しさ
すな方で、インタビューがとても楽しかったです。

中井さんの本音トークもいくつか飛び出してきたり、本
当にあつというまの2時間でした。

それから、一緒にインタビューをしたみなさんも、とて
も楽しいひとばかりでずっと笑っていたような気がし

ます。「国際協力」ってほんと一体何
だろう。家に帰ってから私はそのこ
とで頭がいっぱいでした。今、自分が
できること、自分にしかできないこと。
って、何があるんだろう。日本だけじゃ
なく、世界のことにしても考えるよう
になりました。

山瀬 麻里絵 15歳

今 回のインタビューで中井さんからでないと聞くこ
とのできないようなお話を聞くことができると
もよ、経験になりました。インタビュー前までの私は、
日本からの視線のみで開発途上国を見てました。け
れど、お話を通して、現地の目線からの事実がだんだ
ん見えてきたし、その新鮮さと大切さを強く感じまし
た。私は将来的には国際協力の仕事について、南
北問題の解決の助けになりたいと考えています。これ
から、たくさんの方を学んで、広い視野で問題を解
決へ導いていける力をつけたいです。その時に、今回
感じたことや学んだことを大切に、そして生かしてい
きたいと思っています。また、今回全国各地から集ま
ったネットワーク者達と意見を交換しあうことで私自
身、いい刺激をうけました。「世界の子ども達のため
に一緒に立ち上がろう！」と強い意志を持つ仲間が
いることが分かり、これからはそんな仲間と一緒に活
動していくんだ、と心に誓いました。

田中 和子 17歳

インタビューを通して私はあらためて『世界が抱
えている問題は 私たちのこれからの課題』だ
と思いました。「ソマリア」という国はあまり日本の私
たちには知られていない国だけど、紛争問題・男女差
別などまだまだたくさん問題を抱えている国。でも、
そういうソマリアの中で起こっている問題は「ソマリア
の問題」ではなく、地球市民である私たちのこれか
らの課題だということの中井さんのインタビューを通し
て心の中で感じました。中井さんはソマリアのような

国でユニセフが活動するということは日本の人々たちの
橋渡しをしているということだとおっしゃっていました。
私も早く自分の夢である日本の人々たちの橋渡しができ
る、世界の貧しい国の子どもの力になれるような
仕事につきたいと思います。今回、中井さんはもちろ
ん、同じユニセフ子どもネットワークのみなさんと自
分たちが、今、思っていることをたくさん話し合えた
のでとても私にとってプラスになりました。これから、
私たち地球の子どもみんなが「これらの私たちの課
題」をみつけていけたらいいです。

中佐 友衣 15歳

今 回中井さんにインタビューさせていただいたこと
に感謝します。インタビューして特に印象
に残ったのは、ソマリアなどの現地で働くには「熱
き心と冷たき頭が必要だ」という言葉です。実際、
中井さんは現地のようすや仕事の内容などをドライに
話していて少し驚きましたが、それが現実なんだと
改めて認識させられました。

また、ソマリアの問題を考えると、例えば女性器切
除の問題にしても、ソマリアの問題にしても、ひとつ
の方向から判断するのは危険だと思いました。良い悪い
の問題でないことが多いと思うし、それぞれの立場
があり、そこに歴史やいろいろな欲望が絡まりあっ
ていることが多いです。だからこういった問題は解決
することが難しいのだと思います。だからよりいっそ
う教育が必要だと思いました。

漆原 直美 17歳

左から 西子さん、田中さん、中井さん
漆原さん、山瀬さん、中佐さん